

「第2回鳥取の林業夢語り」
森林環境フォーラム

森林
(もり)
づくり

もの
づくり

の
視点から

報告書

2017年
11月23日(木)

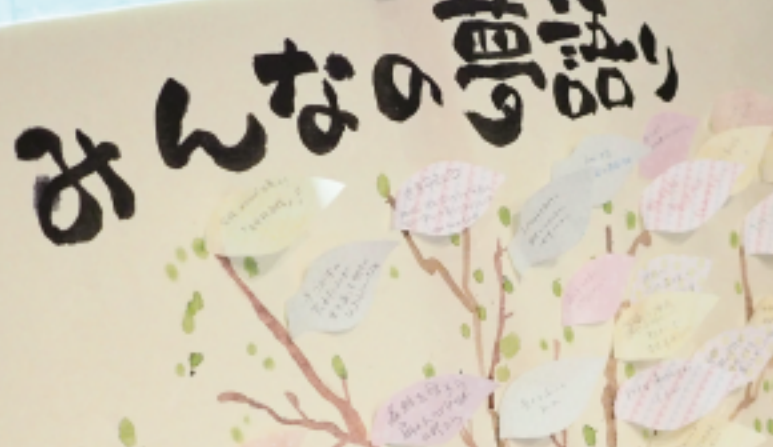
鳥取県立博物館 講堂

主催：鳥取県、杣塾(そまじゅく)

後援

鳥取大学、JST-RISTEX・鳥取大学「生業・生活統合型多世代共創コミュニティモデルの開発」プロジェクト、
智頭町、鳥取県立智頭農林高等学校、智頭町立智頭図書館、智頭ノ森ノ学ビ舎、鳥取森女

この事業は、鳥取県森林環境保全税を活用して、「平成29年度とっとり環境の森づくり普及啓発事業」の「とっとりグリーンウェイブ森林環境フォーラム」として開催されました。



森林環境フォーラム 「第2回鳥取の林業夢語り」

報告書 目次

知事あいさつ … P3
 パネルディスカッション … P4
 アンケート結果 … P15
 編集後記 … P16



タイムスケジュール

12:30 開場
 13:00 開会挨拶
 13:05 映像上映「鳥取県の森林づくり」
 (クラリネット演奏と共に)
 13:10 パネルディスカッション(第一部)
 14:10 休憩
 14:20 パネルディスカッション(第二部)
 質疑応答・閉会挨拶
 15:40 終了



鳥取県知事

平井伸治

あいさつ

皆様こんにちは。本日は森林環境フォーラムに、足元の悪い中、お寒い中こうしてお集まり頂きまして本当にありがとうございました。本日のこのフォーラムは、智頭の杣塾の皆様など多くの皆様にお力添えを頂きまして開催の運びとなりました。関係者の皆様に、心から感謝を申し上げたいと思います。

今日、この後フォーラムでは、田口ランディさん、あるいは山本さんや藤本さん、東根先生も交えながらいろんなお話が出てくると思いますし、また絵本といいますか、そういう子ども達と一緒に楽しむようなこと、またクラリネットなど、多くの皆様にも盛り上げて頂きます。

今お話ありましたが、雨が降る、あるいは風が吹く、そうした自然の中での開催ではありますが、私たちの故郷は、そうした自然の中で育まれてきたわけであります。雨が降れば降るほど、それは水となって土の中から植物を育て、森を育ててくるわけであります。そこに豊かな四季の彩りが生まれるわけであります。岡野貞一さんの作曲した歌の中にも「紅葉」の歌がありますが、そんな季節が今も巡り巡ってやってきたのも、そうした自然の営みの中であります。

特に本県は、74%が森であるという、豊かな森林県であります。北欧と変わらないような、そういう景観を私たちの故郷は持っているわけであります。ただ、残念ながらこの森というのも「荒れてきているのではないか」という声が上がりました。そこで今、全国でも森林環境保全税という税金の話が出ておりますけれども、みんなで森を守ろうじゃないかということを、私たち鳥取では先導してやってきたわけであります。

ぜひ多くの皆様にも山の大切さ、森の大切さ、木々と一緒に暮らすことの素晴らしさを、今日のフォーラムを通じまして体験して頂き、様々なことを学んで頂ければありがたいと思います。皆様のいろんなお力をもって、私たちの故郷は守られています。「秋くれて 深き紅葉は…」という藤原定家の歌がありますが、これは山姫のつくられた色の飾りだと詠まれていまして、今、山の精である山姫がつくった紅葉が私たちの故郷を彩っている、そういうわけであります。そういう中で、今日も森林環境フォーラム開催されますけれども、ぜひ多くの皆様にいろんな意見を寄せて頂きまして、また皆様それぞれの地域でこの森を育てて頂くことによりまして、豊かな森が子孫の代と引き継がれていくことを願ってやみません。

お集まりの皆様のご健勝とご多幸、そして素晴らしい自然が今後も形作られていくことを願いまして、私からの挨拶にかえさせて頂きます。本日は本当にありがとうございました。



森林(もり)づくりとものづくりの視点から

パネルディスカッション

パネリスト/田口ランディ、藤本かおり、尾崎史明、山本福壽 コーディネーター/東根ちよ 司会/古谷葉子

第一部

司会:皆さん、森の世界へようこそ。それでは、「森林(もり)づくりとものづくりから語る夢」と題しましてパネルディスカッションを始めたいと思います。森林づくりが子どもたちの未来と関係があるって本当でしょうか。森林づくりってどんなことをしているのでしょうか。色々な立場で森に関わっているパネリストの方々と、皆様も一緒に思いを巡らせてみてください。ではパネリストをご紹介します。鳥取県の森林づくりを紹介していただきます、鳥取県農林水産部森林・林業振興局長の尾崎史明さんです。木を使って器や子どものおもちゃを作られています、鳥取県ご出身で工房「このか」代表の藤本かおりさんです。山登りがご趣味で2001年に婦人公論文芸賞を受賞されました、作家の田口ランディさんです。智頭の山人塾の塾長で、鳥取大学乾燥地



司会/古谷葉子

研究センター特任教授でいらっしゃいます、山本福壽さんです。そして、コーディネーターを務めてくださいますのは、子育てや生活課題に対応する社会政策などの研究をされています鳥取大学地域学部講師、東根ちよさんです。それでは東根先生、宜しくお願いします。

東根:それでは、普段の森との関わりやお仕事の内容を、おひとりずつ簡単に自己紹介頂ければと思います。

尾崎:はい。森林づくりというのは、基本的には森林所有者の方のお仕事というように考えております。どういう山をつくりたいかビジョンを持つ、それを行政が支援していくものと考えております。現在50年生の木がすごく多い状況です。それを利用することが我々の仕事です。そのあたりをご紹介します。森林環境保全税のお話もさせて頂きたいと考えております。

藤本:河原町で工房「このか」をしております、藤本かおりと申します。木地師(きじし)という立場で参加させて頂いています。木地師というのは、木工ろくろを用いてお椀やお盆など丸い物なら何でも作る、そういう丸物の木工品を加工する職人のことをいいます。昔は山々を移り住んで、その山の木

を使ってお椀などを作り、その必要な分だけ木を使ってその山を荒らしてしまわないような再生可能な状態といいますか、次の良質な材があると、またその山に移り住んでそこでお椀などをつくる、転々として暮らしていくという歴史があったようです。山にとっても関わりの深い仕事じゃないかなと思っています。

田口:こんにちは。作家の田口ランディです。主に小説を中心に随筆やら対談やら色々出しております。40歳と遅いデビューなんですけれども、今までに67冊ほどの本を執筆しています。一番最近に出ている本は、今月(11月)10日に河出書房新社から「逆さに吊るされた男」という地下鉄サリン事件の実行犯の方との交流を描いた非常にハードな小説です。小説家になる一つのきっかけになったのが、屋久島に行ったことだったんですね。屋久島に大分長く通ってまして、屋久島関連の本を2冊ほど出してます。そのことがあって、自然環境問題とかそういうフォーラムに出ることも多く、私のある一部の文学は、環境文学というカテゴリーに入れられております。また私は、父親がアルコール依存症、兄がうつ病引きこもりの末に自殺をしており、そういう経験もあって福祉関係の仕事も多く、特殊な専門分野は全く持ち合わせていないんですけれども、色々な地域に出かけてこういう風にお話をする機会が多いものですから、段々と耳年増になってしまって、あちこちで聞いたさまざまな地域の話題をまた別の所に行ってお話して、それを結びつけて皆様と一緒に考える、ということも多くやっています。

山本:山本福壽と申します。「智頭の山人塾」という、智頭町が運営して、それを実際に動かしている杣塾というものの塾長を勝手に名乗っております。「杣」というのは、山の木もその人も木材も全部ひっくるめた言葉なんですよ。大変古い言葉で、木偏に山と書きます。かつては普通に使われていた言葉を復活して、林業のみならず森林も生活文化も含めて、我々が持っていることを少しでもお伝えしていこうと立ち上げた塾です。

東根:今回は「森林づくりとものづくり」という大きなテーマになっていまして、藤本さんは森を使ったものづくり、田口さん福壽先生はそこに魅力を感じ、尾崎さんは行政として支援していられいます。皆さんにお伺いしてみたいことが、「森林の価値」というのが、実際に体感してワクワクしたりといった以外に、例えば「製品化」。藤本さんはどう製品化をされているか、他のパネリストの方は製品化を進めていく

うでこういう可能性があるんじゃないかという考えを紹介頂ければと思います。

藤本:私は鳥取に帰ってきたのが15年ほど前です。若桜町にお師匠さんがいまして、6年ほど修業を積みました。独立して今は河原町にいます。若桜町も河原町も周りが山に囲まれたとてもいいところです。若桜にいた時は、お師匠さんが当時72歳で、周りにも山仕事をされる同世代の方が沢山いらっしゃいまして、珍しい木が豊富にありました。私が特に好きだったのはエンジュという木なのですが、何とも言えない深みのある茶色で、艶の美しい木です。それが十分に乾燥されて使える状態で豊富にあったんですね。練習材料にも使っていたくらいで。いろんな木、クワやケヤキはもちろん使わせて頂いてました。そこで木の魅力を十分に知ることができましたし、昔の山仕事の話も聞きました。「いい時代だったけれど、これから木地師をするのはきっと大変だよ」と。実際どれくらい大変かはわからず一生懸命続けてきまして、10年ほど前に独立した時は、お師匠さんから譲って頂いたもののストックがあって、ちょっと心に余裕があったんですけど、徐々に「あれ、私はこれからどうしていくんだろう、材料をどうやって手配していくんだろう」ということをやっと思えるようになりました。山仕事の方に「おい、もう山にいい木はないぞ」「エンジュやクワなんて贅沢なものはないぞ」と。「これは困った、私の未来はあるのだろうか、どうやって仕事を続けていくんだろうか」と思ったときに「智頭の山人塾」というものがあると耳にしまして、飛び込んで「山のこと、木のことを教えてください」と言って、今に至ります。私の仕事はものづくりなので、木の魅力を少しでも多くの方に知って頂きたいなと思って、そのためにはパッと見て「いいな」と手にしてもらえものをつくるということもすごく大事ですので、プラスアルファで人に木の魅力を伝えられるものづくりを、と一生懸命考えています。

山本:うちは山人塾・杣塾ですけども、何でも引き受けるということで、「うちには無い」ということは絶対に言えない。そういう組織を作ろうと思ってきたんですが、まさに今後そういう木地師さんが使う材料も含めて「どんな森林を持続的に育てていくか」というのが大きなテーマです。はっきり言いまして、智頭はスギを植え過ぎています。ここは絶対に広葉樹であるべきだというような所までスギを植えてるんですね。智頭は林業景観として日本でも認知されたトップクラスの山林ですけども、これからは広葉樹も含めて多様で、しかも息の長い森林をずっと育てていく。それを、あるものは木地師さんが使う、あるものは建築用にと、様々な使い方をしながら森林の形が壊れることなくずっと持続していくのが理想なんですね。この保全税、大変有用な意義ある税金であります。今後乞うご期待と、我々は皆さんに言いたいですね、ちゃんとした森林をつくりますよ、というふうに考えております。藤本さん、ご安心ください。

東根:福壽先生から保全税という言葉が出てきましたが、このフォーラムも保全税の一環です。尾崎さんに、保全税とはなんぞやというスライドを用意して頂いているので説明をお願いします。

尾崎:鳥取県の森林の状況は、知事からも話がありましたが、森林率74%、人工林率54%という状況です。現在、国全体

では75兆円くらいの森林の公益的機能評価があります。鳥取県としては8227億円です。鳥取県の人工林は54%、智頭町は植え過ぎているという山本先生のお話なんですが、民有林でいきますと、半分の51%がスギになっています。それがどれくらい成長しているかというと、毎年70万m³という蓄積が増えている状況です。鳥取県の素材生産量が27万m³くらいですので、差し引きで年間40万m³が山に蓄えられています。木材価格は、過去を見ますと昭和53年ごろが一番木材価格が高く、平成17年に落ち込んで、現在はスギで1万円、ヒノキで1万5000～6000円という状況です。年齢配置ですが、50年生くらいの山が一番多く、人間の人口と一緒に少子高齢化が山にも迫っているという状況です。鳥取県ではそういう状況の中で、平成17年から森林環境保全税というものを導入しています。税の目的は「県民全体が恩恵を受けている森林の公益的機能を持続的に発揮させるため」「広く薄く偏りのない負担により森林の保全を行う」「県民のみんなで森を育てる意識を醸成する」です。高知県が一番早く、平成15年にスタートし、現在では37の府県で導入されています。森林環境保全税は、第一期から第三期までありまして、第一期は3年間、平成17～20年までの3年間で、一人当たり300円を頂きました。2期目から5年間に期間を区切り、500円。現在は第3期目に入っています。平成30年の3月で3期目の5年を迎えます。4期目をどうするかという話もして、ひとまず5年間は延長させて頂きたいということで条例改定案を検討しています。



尾崎史明 鳥取県農林水産部森林・林業振興局長。鳥取県八頭郡智頭町出身。フォーラムでは、鳥取県の独自課税である森林環境保全税を活用した森林づくり活動等を紹介。

次に税収と用途です。一人当たり500円頂きますと、年間1億7000万円くらいの税収になります。これを森林の整備に使います。具体的には間伐、県民参加の森林づくり、森林の保全、竹林の整備、森林景観対策などです。森林の保全整備が8900万円、放置竹林対策が4800万円で、一番多くなっています。県民参加の森林づくりということで、県民に森林に対してご理解を頂くための独自の取り組みを支援して、900万円です。鳥取県民参加の森林づくりは、平成17年から249の企画が提出されています。延べ5万8000人のご参加を頂いて、森林づくりに取り組んでいます。具体的には千代川流域、日野川、三朝温泉、米子ロータリークラブさんですとか大山の関係です。日野川の取り組みをご紹介しますと、高校生の自然環境の保全、体験学習の支援なり、講演会。それから「森林の田んぼ」という企画があります。三朝町のカジカガエル保存研究会では、「森を育て、カジカガエルの住処を守る」を目的として、落葉広葉樹を植栽し、植栽した所を下刈りして森林づくりをされている。そういう所に環境保全税が使われています。最近、直接的な森ではないですが、県内の水産関係の取り組みで、美保湾、境港にも

サーモンと名付けられた銀鮭の養殖が始まっております。美保湾の水、日野川の水と繋がっていくのかと思いますが、そのあたりで企業が進出をされている。同じように、琴浦町では銀鮭の稚魚の養殖の取り組みをスタートされています。

東根:田口さんに伺います。世界中で色々な状況を見られますが、鳥取のものづくりや森林の状況を見て感じられたことや、これからの可能性についてコメント頂ければ。

田口:プロダクトデザインというのは要するに、売れる製品にするにはどうしたらいいか、ということなんです。すごく難しいことで、企業だって自分の所の製品をどうやって売ろうか、毎日専門の社員が考えているようなことなの。だけど、色々な地方に沢山の名産物があるじゃないですか。例えば今回の場合は藤本さんが作っているすごく可愛い器とかね、木で作った茶筒とか、さっき見せて頂いたんだけど素敵な。でも藤本さんはつくる側だから、売るの専門じゃないわけ。世の中のいろんな地域には、そういういいものが沢山ある。だけど、それを売っていることを考える人が少ない。これ、どこの地域にでもある日本中の問題なの。成功している地域には必ず地域キーマンがいます。どういう人かという、(山本氏を指差して)まさにこういう人。私から言わせると、地域キーマンです。智頭には山人塾があって、やろうとしていることは、地域キーマンのネットワークづくりなんです。地域キーマンというのは、皆さんでもなれるんです。彼女よりもちょっと多くの知識を持っていれば彼女よりもいろんな事ができます。東京でしばらく働いたことがあるとか、アパレルの会社やってたとかいう経験があれば、「彼女の作っているものはすごくいいけど、こんな風に工夫したら原宿でも売れるのに」とか思いついたりする。でも彼女にわざわざ言いに行ったり、自分のアイデアを実行するのは面倒臭い。「じゃあそれあなたがやってよ」と言われるとそこまでの縁はないしな、とか。そういう時に「こういうアイデアあるんだけど、どうかな塾長」「そりゃ面白い」と実行に移せる、そこが素晴らしいところだと思います。成功している地域には必ずこういう人がいます。

東根:何か具体的なお話はありますか？

田口:石川県の羽咋市(はくいし)です。限界過疎集落だったんですよ。すごくいいお米がある、だけど売れない。農協に出しても他のお米と一緒に値段を付けられてしまって、年寄りしか農業をやっていないくて、このままだったらうちの町終わり、っていう時に、東京でマスコミの仕事をしていた高野誠鮮(じょうせん)さんという人がUターンして戻ってくるんですよ。彼の家はお寺だったから、お父さんの仕事を継ぐためにお寺に帰ってきたら、お父さんが割とピンピンしてたので、暇でした。そしたら自分の高校時代の同級生が市長をやった。「暇だったら、300万円で何とかしてくれよ」って、限界過疎集落救済事務局みたいなところを市の中



田口ランディ 作家。趣味は山登り、ヨット、カヌー等。2001年に婦人公論文芸賞を受賞。小説以外にも、エッセイ、旅行記、ノンフィクションなどを幅広く執筆。著書は、共著も合すると60冊以上。アート、音楽など他分野のアーティストとのコラボレーションを展開。ご自身の家族の体験から福祉・介護・精神医療にかかわる仕事も多い。

に作られてしまって、彼はそれをやることになったんです。彼は東京に出てマスコミの仕事をしてたから、アイデアがあった。「うちのお米すごくいいけど、誰も知らない。このお米を有名にするにはどうしたらいいかな」と考えました。お米が作られている地域が「神子原」だったから、「そうだ、ローマ法王献上米にしたら売れるんじゃないか」と思ったんです。それで彼は、ローマ法王に自分で手紙を書くんです。バチカン市国宛てに手紙を書いて「神の子の住人たちの作った、素晴らしい水のお米があります。そのお米をぜひ法王に献上したい」と言ったら、ローマ法王が受け取ってくれたんです。やったーということになって、「ローマ法王献上米」っていう名前をサブで付けたんです。そしたら、日本中の教会からバザーに出させてくれるというオファーが来た

んです。それで有名になって、神子原って町の地域おこしが始まるんです。今度はローマ法王献上米で酒を作ろうってことになって、彼が何をやったかということ、東京の外国人記者クラブで記者会見をやって、外国の記者たちに無料でそれを飲ませたんです。あまり日本酒の味がわからない人たちなんだけど、ローマ法王献上米で作った日本酒って言って飲ませたら「美味しい」ということになって、世界に発信してくれたんですよ。それから、世界の三ツ星レストランからオファーが来て。彼がやったことは、彼ができることなんです。地域キーマンがいると、藤本さんが作っているものも全く別の価値

が生まれて、いろんな所に紹介されていって、そういうことで注目を受けるとまた別の動きが生まれてくるという、いいサイクルが生まれてくるんですね。それは、誰か特別な人がやらないといけないわけじゃないんです。智頭がすごくいいなと思ったのは、山人塾があるから、自分では自信ないと思って、福壽さんの所に相談に行けば、彼のネットワークで「じゃあ田口さんに聞いてみるか」とか「県庁の方に行ってみるか」と広がっていく可能性があるわけですよ。誰かが思いついたこと、誰かがいいなと思ったことを受け入れてくれる、懐の深いゆるいネットワークがあるということは、もうこの鳥取はこれから発展間違いなしなんです。

山本:じゃあ、ローマ法王にスギを送ろう。

田口:ということ、私は昨日から感じてたんですよ。だから、興味を持ってこういう所に来てくださる方は、全員地域キーマンになる可能性、潜在的ポテンシャルを持って人なので、今日家に帰って思いついたことはどんどんメモするなりして伝えてくれたら、実現する可能性は99%できちゃうくらいあるんです。本当にできちゃう。それをやった所がいい地域になって、お金が儲かる。人が潤う。その事をここに来て一緒に地域を回っていて感じたので、この流れを先生頑張って、と思います。

山本:キーマンたらんとする自負はあります。何から何までと言いますと、それはホラになってしましますが。ホラって

いうのは吹いていいんですよ。嘘はついちゃいかんけど。私は生涯ホラを吹き続けてきたような気がするんですけど、ホラを吹いているうちに実現していく事が多かった。智頭は日本の第一級の林業地だと思います。ここが元気になれば日本全体が良くなっていくと思っています。沢山の友人もいますし、新しい友人もいるし、いろんな情報を網羅して、人々に動いてもらって。智頭に限らず日本全体を含めて、より森林を含むエリアが活性化していくように、考えていきたいと思ってます。尾崎さんどうですか。

尾崎:昭和30年代40年代に一生懸命木を植えてきました。それは孫の為にとか、将来木が高くなるからという夢を見て、しかし結果それが今のようになっている。木材価格が非常に下がってしまったという状況もあります。県土の54%が人工林になったという状況ですが、山というのは、山間地に暮らしながら、農業をしながら、その余剰労働力で山にアプローチしてきました。そこで米を食いながら孫の為に、将来50年後の為にという、夢を見てきた人々がいて、今の山があります。我々林業職員がよく言うのが、山に行けば54%ですから、半分はスギやヒノキがあるわけです。1本1本全て植えてきたものがそこにあるわけで、急に今の山があるわけじゃない。そこをやはり意識をして、その資源を本当に有効に活用していく。今後その木をどういう風に育てるか、伐採して使って頂くとか、そのあたりどういう夢を描くか、という所が我々の課題です。

田口:宮城県の気仙沼にNPO法人「森は海の恋人」というのがあるんです。東日本大震災があって、牡蠣の養殖をやっていた畠山さんの養殖が壊滅してしまったわけですね。その時に畠山さんは何を考えたかと言うと、自分たちが牡蠣の養殖ができたのは、素晴らしい山が背後にあるから、いい山があってこそ海であり、いい山を持っている海が豊穡だからこそ我々が食べて来られた、仕事ができてきたんだということで、山の植林を、牡蠣養殖業の方たちが中心になってやっています。この発想がすごく素晴らしいと思って、海と山と川と言うのではなくて、海・山・川がひと続きで、海が山の恋人なんだって、その海と山の橋渡しをしているのが川なんだと。その全てが私たちの生活を支えている、それをNPO法人として活動することで伝えていこうということをなさっていて、震災で大変な思いをされたのに、原点に立ち返られて植林をされているところが本当に素晴らしいと思います。そこに山とか海とか森林を含めて考えていく、すごい大きなアイデアがあると感じていて、さっきも海が豊かだから、鳥取のどこかの企業さんが来てくださったんですよね。ぜひその企業さんに植林して頂いて、山も宜しく、という動きができればいいですね。

山本:私は大学で造林学というテーマで教育をしてきたんですが、山というのは有機質に覆われているんですね。そこ

から様々な有機酸が川を流れて下っていきます。特にフルボ酸なんかは、鉄とくっついてフルボ酸鉄というのができて、それが海に入ると、海藻を作るんです。川を流れてきた養分で海藻が育つ。極端な事を言えば、海に肥やしをまいても海は肥えるんですよね。どんどん山の有機物が海へ流れていき、そして海が豊かになる。山が痩せれば磯焼けと言いまして、磯の生物がいなくなってしまうんですね。ですから、山があるからこそ海がある、豊かになる。持続性という意味では、年齢40年50年くらいがものすごく多い。でもね、今1年生や2年生という若い木が無いんですよ。今育てなきゃ、伐る一方になってます。利用しよう利用しようとなっている、ここで更新が大事です。今こそ更新しておかないと50年先に、我々の子・孫の代に木が無くなってしまいます。

ですから、今こそ次の世代の事を考えて、ジタバタしなければいけないと思っております。

田口:日本中のいろんな地域でも「植林しよう」という空気が広がっています。「伐る政策から植える政策へ」ということを、日本繋がってますから、ここで起こっていることは他でも起こっているんです。だから気仙沼の方たちも木を植えようということで、震災を機に森の木を見直そうよ、という動きが広がっているんですね。智頭でも起こっている。それをもっと全国に広げていけば、次の次の代の人たちがとっても潤う。

山本:皆さん、鹿肉をどんどん食べて

てください。シカが最大のネックなんですね。現在山に木を植えようと思ったら、丸坊主にされます。昔はこんなにシカはいなかったですね。ですから鹿問題が死活問題。

東根:藤本さんから、子どもたちに木を伐るものと環境保全が繋がっているという説明が上手いかず悩んでいるというお話を聞きました。木を伐ることが環境保全にどう繋がっているのか、福寿先生か藤本さんいかがでしょうか。

藤本:環境保全、森林保全と言うと、「守る」というイメージですよね。守ることも、伐ってどんどん使いましょうということは、どうしても繋がりにくい。ちゃんとした理屈があるんですが、わかりやすく説明する、みんなで共有するのが本当に難しいなと思っています。光合成とか、CO₂を吸収してO₂を出しているくらいはわかるんですが、ちゃんと習ってこなかったと思って。20代前半に木の仕事を始めた時に、木工作家仲間たちが集まって話をする時に、「自分たちは木を伐って環境破壊をしてるんじゃないか、この仕事をしていいんだろうか」と、本気でお酒を飲みながら悩んでいたんですね。そういう時に誰一人「いや、そうじゃないんだよ。木を伐ることはこうなんだよ」と説明できる人がいなかった。私も本気で悩んでましたし、知らなかったんですね。わが子の先生や尾崎さんに、昔の教科書に木の事や森林の事が載ってましたかと聞いたりしたんですが、「おそろくなかったんじゃないかな」と言われました。花や作物の事は習うん



山本 福寿 岐阜県関ケ原町出身。智頭の山人塾塾長。鳥取大学乾燥地研究センター特任教授。鳥取大学農学部教授を退官後、智頭町に移住し、里山暮らしを応援する「智頭の山人塾」を開塾。楽しくわかりやすい講座には、県外からの受講者も。ベトナム・スーダン・中国などの海外でも樹木の研究を継続中。樹木生理学が専門だが歴史にも造詣が深い。

ですけれど。今も書店に行きますと、子どもの本のコーナーに花や草花の図鑑や絵本は沢山あるんですけど、木に関する本は中々無いんです。ネットで探すとうまく出てくるんですが、書店に並ぶほどの物でなかったり、図書館にあってでも書庫に閉まってある状況です。今の子どもたちはどうかなと思って小学校の先生に伺ったら、総合の学習の時に高学年になると、CO₂や炭素を固定するということを習うそうなんです。子どもの時からそういう事をわかりやすく当たり前の知識として持っておく事がいかに大切か、という事を感じています。

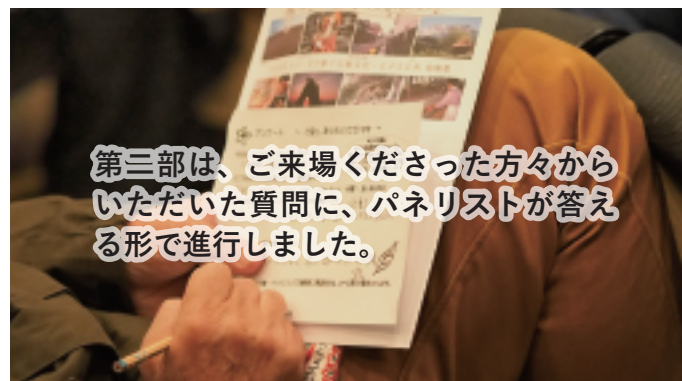
山本:高校の時に光合成は習うんですけども、対象が全部草本ですよ。高校のテキストを書いている人は、理学部系の人です。理学部の人、植物の事を習う時は草本で習っています。木本は習わないですね。でも地球上のバイオマス、生物、この最大のボリュームは、木なんです。ほとんどが木と言ってもいい。地球の炭酸ガス問題は、現在400ppmありますが、私が学生の時は300ppmちょっとでした。400ppmの炭酸ガスを吸って固定するのは、山と海、つまり森とサンゴ礁です。特に木は炭酸ガスが光合成というシステムで最初にブドウ糖ができて、それがものすごく長いチェーンになるとセルロースという糖になります。セルロースは実は糖分なんです。あまりにも分子が大きいので、水に溶けずに固まったままで、これが木材の本質です。私は築後百数十年の古民家に住んでいます。柱はクリの木です。100年前に作られたとして、そのクリの木を形成した炭酸ガスというのは、100年以上前、ともすると200年前に日本で固められた炭酸ガスが固まったままでいるんです。皆さんが木造で家を建てて、100年持たせたとしたら、それは地球に貢献することになります。炭酸ガスが固まった木を燃やさず、腐らせずに100年持たせたら、それだけで地球は救われていきます。つまり町の人、森林を通じて地球に貢献しようと思ったら、木で家を作る事です。それも、いい木でいい家を作ってください。すぐ燃やしちゃうようなものは……燃やしたら炭酸ガスが地球に還るだけです。一番大きな問題は、化石燃料を掘り出して昔むかし、地球が内部に埋め込んでしまったような炭酸ガスを掘り出して地球に出している。そいつが炭酸ガスの濃度をどんどん上げています。トランプさんはこれは嘘だと言っている。どういう根拠でこれが嘘だと言っているんでしょう。樹木を使うということ、木を伐って使えば、今度は山が若返ります。若返るということは、炭酸ガスを吸収して固めていく能力がものすごく高いという事です。老木は、私と同じように固定する能力が下がってきてますね。それはむしろ伐って利用した方がはるかに地球の為になります。ですから、それを回転させていくことを、林業といいますね。木を使う事自体が、地球にとってものすごくプラス効果になるんです。

田口:林業のりんは、輪のりんでもあるんですね。

山本:左様でございます。輪林業ですね。

田口:私たちは、一世代で物事を考えがちになりますけども、回転は、三世代五世代という回転を考えれば、すごく安定した地球環境に通じるということですね。ありがとうございました。

第二部



東根:質問を沢山頂いてありがとうございます。田口さんのような人に鳥取のキーマンになって欲しいというコメントを二人頂いています。

田口:ありがとうございます。

東根:田口さんは県外から来て頂いているんですが、「森林に県内外から来てもらうためにアイデアも必要でないか。東北でやっている『100ツリーハウスプロジェクト』のようなものがある」とコメントを頂いています。県内外からもっと来てもらうアイデアということですが、田口さん何か感じる事がありますか。

田口:鳥取の山がどう特殊かというアピールが足りてないんですよ。もっと鳥取の山のすごさをアピールしないといけないですね、先生。

山本:智頭の芦津の奥の方へ行きますとスギの天然林があります。これは遺伝子保存林として国が指定している所です。こういう昔からほとんど手つかずの森林というのは、屋久島の屋久スギからずっと、点々としか分布していないです。それが鳥取の智頭の芦津の奥にある。学術的にもものすごく重要な森林を我々は抱えているんですね。そこからスタートして智頭林業というのは、隆盛なものになったんですね。クマの出るような所を歩いて行きますと、沖ノ山スギの元になった大きな木があります。これが我々のお宝として残してあるという所が、うちの売りだという風に思います。

田口:ですから、スギだったら屋久島だろうと考えている人が多いのは、屋久島が世界遺産に登録されて、それで宣伝したからです。「屋久島はスギだよ」と。でも「鳥取もスギだぜ」という風にもっと押し出していいいんですよ。その為には、鳥取の皆さんが、「鳥取のスギってすげー」という認識を持つ。ツイートするなりフェイスブックなり「今日こんなこと聴いちゃった」という風を書いていけば、「鳥取って屋久島みたいなスギがあるんだ」という認識広がっていく。ネット社会だから情報が広まるのはとても速いんです。鳥取の良さはまず鳥取の人たちが発見してどんどん発信していけば、それで人はガンガン来る、そういう時代です。

東根:もっと知ってもらう事が必要ではないかというお話でした。全てのパネリストの方に聴いてみたいというコメントを頂いています。「日々パネリストの皆さんが市民や顧客と話をする中で、森林や木材に対する誤解や無関心を感じることはありますか。もしあるとするなら、その原因は何だと思いますか。克服のアイデアがあれば、併せてお聴かせ

ください」という質問を頂いています。

田口:よく若い方が持ちがちな誤解は、「自然にとって人間は害である」という考え方です。「私たちは世界の痛みたいな存在で、人間さえいなければ、地球環境はよくなるのに」というお考えの方が時々いらっしゃいます。私は間違いだと思っています。人間が関与することで、山は本当に豊かになります。昨日も先生がおっしゃっていたけれど、植物というのは、ものすごくサバイバルな状況で光を奪い合い、場所を取り合いながら生きています。それが極限まで行き詰めると、あまりいい山にならないですね。そこに人間の手が関与すること、お手入れをすることによって優しい森になる、海もそう。人間の力ってすごいんです。ちゃんと環境にとって何が大切かを、人間は自分の意思で考えることができる。自分の事を考えて、環境を自分の側に引き込んでしまうから環境の害になるけれども、環境の側に立って、考え方を变えることもできる。そして環境の為に動く事もできるんです。どちらも人間はできます。でも、人間が関与すれば、山は豊かになります。そうですね、先生。

山本:です。例えば里山というのがありますよね。里山を守れという活動をしている所も沢山あるんですが、何をやっているかという、一つは「伐るな」ということ。もう一つは「綺麗にするんだ」ということで、ブッシュを伐ってしまっただけ残して公園にして里山ができたという。でも里山とはそういうのではなくて、使い続けているのが里山です。それで安定しているんです。動的安定と呼んでいます。常におじいさんは山へ行って柴を刈って帰る。そうすると、後で木が生えてきて大きくなって。そこは、生物がものすごく多様になりますので、キツネ、タヌキ、クマ。クマまでは行かないですかね、イノシシと、何でも住んでいるような環境ができます。それが里山で、我々が住んでいる近くの森林はそれだったんですね。智頭はやや奥山に入るかもしれませんが、こうやって人間の介入しなかった場所なんて地球にほとんど無いと言ってもいい。あると言えば、ギアナ高地で誰も入っていない。そういう所もありますが、必ず人間が入っています。かなり奥へ来たなと思ってそこに生えている広葉樹を見ると、二股になっている。二股の木というのは、前に一度伐って、そこから芽が出て二股になったので、必ず人間は介入し続けてきたんですね。森林環境と我々人間とは共存し続けてきたということなんです。ですから、人間が減れば、森林はガラリと変わっていく。そんなものじゃなくなっていく。森林は残りますけれども、我々が思っているような森林ではなくなってしまうということは言えます。

尾崎:私どもは木を沢山使って欲しいと言っているんですが、最近マンションが多かったりして壁には壁紙が貼られていることが多いと思いますが、一面でもいいですから、木にして頂けたらと思っています。壁紙だと10年くらいで古びてきますが、木だと熟してきて、10年すると普通の白木が飴色に変わってくるんですね。それがずっと永久に、燃えない限りその状況がある。木が熟する、更には油がのってくる、空拭きすれば光ってくる。古い家では鏡戸というものがあって、そこは空拭きをしていて、光っていたんです。光っていて当たり前だったんです。木は高いかもしれませんが、そ

こを長期に考えて、管理も考えて、やって頂けたらありがたいと思います。



藤本かおり 鳥取市出身。木地師。工房このか代表。智頭の山人塾スタッフ。岐阜県飛騨高山で家具製作の修行後、木地師を志し鳥取へリターン。河原町にて伝統技術を活かした、現代の暮らしに寄り添う器等を制作している。木のおもちゃ作品はわらべ館にも収蔵展示。現在、島根大学の講座に参加して木育や森林について学んでいる。二児の母。

藤本:木製品高いと思われますよね。私がつくるおまごとセット一つにしても、高いんです。私も買う立場になると高いと思うんです。つくる人間は、まずお客様に安心安全に使って頂ける状態で作品を提供するという事が第一なんですね。そこを遡っていくと、健康的な価格というのがあっているんです。その製品が健康である、安心して使って頂ける物であるのが第一。その為につくる人間も健康でなければならない。つくれる状態でなければならない。その先に製材して下さる方、山を守って下さる方、山が健康でなければならない。長い歴史を過ごしてきた木がここに製品になるまでに沢山関わってこられた人だけじゃなく、山々や木、全てが健康であるからこそいい物としてそこに存在するんですね。それを理解して頂く為に、私たちは更にいい物を作らなければ台無しになってしまうので、そこは自分たちの責任だと思っています。その先、尾崎さんが言われたように、10年20年孫の代ひ孫の代まで使って頂けますし、木は手入れできますし、修理もご自分できるところも含めて長い目で見て頂けると、うれしいです。

山本:木材を使って家を建てる、耐用年数の問題があります。実はコンクリートと鉄で作ったりすると、耐用年数もものすごく短い。おまけにコンクリートは石灰岩をどんどん焼いて作るの、ものすごい化石燃料を使いますね。鉄も鉄鉱石から作ろうと思ったら、化石燃料を山ほど使っている。木はほとんど使いません。山でチョンと伐ってきて、製材所へ出して、そのコストなんて安いもんです。木というのは大体伐採してから100~200年でマックスの硬さになって、それからずっとゆっくり柔らかくなっていきます。1000年くらい経つと、伐った時くらいの硬さになります。法隆寺が1000年経っていますよね。でも一番最初木材だけで全部作っているわけではないですよ。少しずつ手入れしながらあそこまで持たせているんです。1000年のもつというのが木材なんですね。コンクリートと鉄で作った戦後のアパートなんて、全然使い物にならないでしょう。木造の住宅では、ちょこちょこ手入れをしていくだけで、しっかりした状態をずっと維持できる。どんどん良くなる。様々なひずみが出たりしますけども、それをちょこちょこ手入れしながらもたせていけば、ずっと木の家に住む事ができる。我々一代以上に使えるわけですね。木材の良さってまさにそこです。どんどん硬くなっていきます。

東根:林業の時間軸について「今の50年100年というスパンは短いのではないか」、「100年200年先の鳥取や日本や世界を考えた時に、今森林に対してどういうことをしなければいけないのか、そういった長期的な普通の生活とは違う時間軸というのを重視する必要があるのではないか」といったコメントを頂いているのですが、いかがでしょうか。

尾崎:難しいんですが、私が山の中に住んでますとそれぞれの家を守るというか、家全体の形を見るとそれぞれに時間軸があるのかな、と思っています。私は月給をもらっている



東根ちよ 和歌山市出身。鳥取大学(地域学部地域学科)講師。政策科学博士。子育てについて援助活動を行う「ファミリー・サポート・センター事業」についての論文も発表。研究のテーマは、生活課題に対応する社会政策、地域創造に関する政策の分析ツールに関して。現在は、智頭町の森のようちえんの活動について調査中。

ので月ごとの時間軸が一つあって、米を作っていると年ごとの時間軸がある。椎茸を作っていると、年ごとプラス5年位でほだ木がダメになるので、5年くらいの時間軸がある。山を作っていると、50年60年の時間軸があるという風に。林業の時間軸ですが、過去に先祖は一生懸命木を植えて100年生位の木が育っている山があるんですが、今後どう料理していくのかという所が課

題ではないかと思います。100年、その次の100年をどうするか。私がもし100年後も生きていたとすれば、今50年生の木をすごく薄くして、ヘクタールに50本くらい残して、下に木を植えたい。すると、50年後には下に植えた木が50年生になり、残した木が100年生になります。100年の木も50年の木もあるという山づくりができれば、家と一緒に爺ちゃん・親父・私がいるという、多世代の山ができて、山としての力がついてくるんじゃないか。話がずれているかもしれませんが、それが私の山に対する時間軸です。家とか地域とかの時間軸というのは、そういう意味かなと考えています。

山本:智頭の場合、遺伝子保存林というのは、無限の時間をそこで維持していく必要がある。様々な林業地では多様な状態で樹木が生きているのが大変重要ですね。例えば柱材、芯持ちの4寸角が欲しいとなると、大体40年50年くらいの程度のヒノキでないと本当にいい物は採れない。それより大きくなると、無駄がものすごく出てくるんですね。そして、板材のスギのいいのが欲しいとなると、もっとサイズの大きな70~80、100年の木を伐る。それぞれにいろんな用途でいろんな時間が経過した木を使っていくという状況なんですね。全てずっと置いておいて巨木にしたらいんじゃないかという考えもあるかもしれませんが、我々が使うという側に立つと、それぞれのベストな時・最も熟した時があるので、そういうタイミングで伐って、更新をしていくという、様々な時間・多様な時間が木に流れている、それをみんな見ていきながら、全体的に長く維持していくというのが、林業だと思います。先ほど言いましたように、未来に亘ってずっと保存しようという森林は当然、持ち続けていかな

きゃいけないわけですね。

田口:個人の林業家の方って、とっても減っているんですけども、ご自身で山を持っていて、山を管理していらっしゃる。そういう方に何度かお会いした事があるんですが、大体皆さん七代先を考えるとおっしやっていました。それが林業家だと。でもそれが上手くいってない、というのが正直なところなんだそうです。

東根:森林の価値を考える際に、森林は人としての豊かな生活をするうえで、必然的に必要なものじゃないかというコメント、またこれに関連して「高齢者の認知症予防であったり、子どもたちの精神安定や学習能力の向上にヒノキの香りがよい影響を及ぼすと聞きますが、こういうものを行政として積極的に導入してはどうでしょうか」という生活と自然との関わりについてのコメントを頂いています。

藤本:例えば木は、自分が思い描いたものを自分の手で形にする事が出来て、なおかつ長い事使う事ができて、壊れて修理して使う事ができる。スプーンでしたら自分でできますし、素材として生活を豊かにしてくれるものであったり、それをお孫さんが使うということになれば本当に豊かだと思います。また、山で生えている木は、樹齢が何年だ何千年だといって感心されるのですが、製品になった時に、例えば皆さんが今日されているブローチなんかですと、これは樹齢何年だろうと思われる方はおそらくそんなにいらっしやらないと思うんですね。でも年輪がここにありますね。これはどの時代を生きた年輪なのか。このブローチでも長い歴史があって、話したいことが沢山あると思うんです。ですので、何となく「あなたは何年生きたの、年輪のここはどんな事件が起きましたか、楽しい事がありましたか」というようなことをふと感じる、なんてことを木製品を見る時にして頂けると、それはそれで一つの豊かな気持ちかなと思います。

田口:以前に精神的に辛い事があって生きるのがしんどくなってしまった方を3か月程自宅にお預かりしたことがあるんです。その30代の女性の方が家に暮らすようになってから1週間目くらいかな、朝、家の庭にスイリユウヒバという名前の大きな木があるんですが、それに抱きついてるんですよ。その方は、「わからないけど、この木に抱きつくと落ち着くんです」って言うんですよ。本当に朝な夕なにそのヒバにこうやって抱きついてるんです。そのうちに段々落ち着いてきて、お家にお帰りになられたんだけど、あれはやっぱり木が彼女を助けてくれたんだなと思って、本当に個人の体験なんですけど、そういう事がありました。

山本:生物に囲まれている生活というのはいいですよ。木質材料は有機質ですよ、コンクリートと鉄ですと無機質な環境でしょう。小学校ではあちこちで木造にしたり内装を木にしたり、そういう教育・環境で育てた方が遥かに情操教育に宜しいと聞くんですけども、おそらく心の落ち着きようが変わってくるという気がします。我々は建物に囲まれている。木のフローリングなど、内装を木造にしているところと、刑務所の箱の中、僕は行った事無いですけどね、コンクリートの箱の中に入るのとえらい違いだな、という気がします。おそらくこれを数値化している人もあるでしょうし、それなりの専門家もあると思いますが、まさに有機質、生命の生み出したもので囲まれているという方が遥かに生きる環境としては宜し

いんじゃないかと思うんですが、どうでしょうか。

尾崎:豊かな生活って、この日本全体が豊かな生活で、鳥取は特に水が豊かで渇水する事もない、ため池も少なくですんでいるという状況かな、と思っています。蛇口を捻れば水が出てくるのが当たり前、これが本当の豊かな生活なんじゃないかな、と思っています。アフリカからの留学生が来ておられて、日本に来て持って帰りたいものは何ですかと聞いたときに、留学生は「ここに流れる小さな小川が持って帰りたい」と言われたと聞いたことがあります。これは、日本の環境自体が非常に特異の贅沢な環境なのではないかな、と思っています。

山本:サウジアラビアに結構長い間通っていきまして、研究者を呼んで鳥取に来てもらいました。そしたら、道端に水がさらさら流れているでしょ。鳥取だったらどこでもありますよね。「ナチュラルウォーターがある」と言って写真を撮っているんです。「そんなのどうするんや」と言うと、「これは飲めるか」と聞かれて、「沸かして飲めば飲めんことはないけど」と言いました。水と緑というのは、究極はそこですよ。我々は水と緑、その産物の中で生きるとするのが理想なんですよ。

東根:「鳥取の木育の取り組みはどういうものがありますか」「藤本さんが木育に関わられていたら、その実際について教えてもらいたい」という質問をいただいています。

藤本:木育というのは、小さな頃から木製品等を使って木に親しむことによって、木・山に目を向けるきっかけにして、環境問題にも生かしていきたいと思います。鳥取県でも随分力を入れていまして、私も関わっています。智頭町は森のようちえんもありまして、全国的にも有名な木育活動だと思います。ものづくりの立場から言いますと、木製品というのは、一番最初に赤ちゃんでも触れられるよい素材だなと思うんです。一つ一つ色も違えば匂いも違いますし、音なんかも違う。触り心地、重さも違うという、五感を刺激してくれる素晴らしい素材だなと思いますし、子どもがちょっと訓練すれば、自分の思い描いたものを作る、使う事が出来るというの也有ります。私が最近すごく思っているのは、子どもたちは特に目に見えるものに対して感謝するというのはできていますね。学校なんかでもサツマイモを植えて収穫して「ありがとうございます、頂きます」というのはするんですけど、「当たり前」に生活できている空気に誰か感謝するかなあ」「じゃあ、この美味しい空気は誰が作ってくれているかなあ」、こう思うというのはなかなか難しいと思うんですね。目に見えない物を、山に行った時に「美味しい空気だね。これを作ってくれているのは木たちだね」という会話がちょっとでも親子の間であると、それもまた一つの木育かなと最近私は思っています。

尾崎:木育は、鳥取県は3年くらい前からやっております、木育広場というものを作っています。2基の木育広場、5×6メートルくらいの大きさの物を持っています。1基は常設で、出合いの森のホールに置いてあります。あと1基は貸出という事で、ご要望にお応えして保育園に貸出をしているという取り組みです。木育は日本語ですが、「ウッドスタート」という言葉があって、これは東京おもちゃ美術館さんが商標を取っていらっちゃって使えないんですが、ウッドスタートというものも智頭町ではやっています。小さな

頃から木に親しんで頂く取り組みを進めておりまして、呼応して頂く町もあります。木育は、30年後の投資と思っていますので、もしお子さんがいらっしゃいましたら一歳の時からそういうものをおそばに提供いただけたらと。

田口:これから政府の方針が変わって保母さんの給料も上がりますし、保育所はきっと増えると思うんです。働きたい女性も増えるし。鳥取県は、これから新設する保育所は全て木造ですべきだと思います。それこそが木育じゃないでしょうか。そういう県になってこそ、木育の鳥取県だと思います。宜しくお願いします。

山本:智頭町の保育園は木造ですよ。

田口:これから新設する保育園を木造にするのはそんなに大変な事ではないと思うので。

山本:智頭に森のようちえんがありますよね。去年の夏ちょっと子どもたちのお世話をしたんですけど、面白いですね、あの子たち。結構急な笹のある斜面で上の方に面白い植物がありました。ゴマギという臭い植物なんです。「取ってきてあげるからそこで待っていないさい」と斜面を登って行ったら、子どもたちは待っていないで上がってくるんです。ああ、こいつらお猿だな、と、まさに子どもたちをお猿として育てている、これはすごいなあと思ひまして。つまり原点に立ち返れるんですね。子どもの時代というのはコンクリートの中で子育てするよりも、はるかにワイルドに生きる力を持つようになると思います。結構、知り合いが多くて、小さいお友達がたくさんいるんです。それが大成功した一つの例です。山人塾は小学生から広げて大人まで、それからお年寄りまで相手にしていますので、森の幼爺園と言ってもいいかもしれません。最高齢で90歳を超えています。それくらい緑と木というのに取り囲まれて生きるというのは、子どもの教育に限らず、我々死にゆく者もこんな極楽はない。棺桶は木で作られていますからね。

東根:「鳥取で古い木を活用する場合は、どのように活用されていますか。鳥取の活用例で他県と比較した時の特徴があればぜひ教えてください」というコメントがあります。これに対してはいかがですか。

尾崎:古い木というのは定義が難しいんですが、木材というのは地上部から4メートルくらいが一番材価・質として高く、上の方にいくと段々材が未成熟になっていて、下の方からA材B材C材と言います。A材はいわゆる製材加工するため工場へ送られて、B材というのは合板工場で、鳥取県には日新さんですとかが境港にあります。C材というのがバイオマス燃料になるところでして、チップ燃料です。そういう風に区分しています。現在B材とC材の需要はかなりあって、足らない状況にあります。ただ、A材と言われる一番いい所の



部分の材価が上がってこないで、B材並み、8500円とか1万円くらいの値段でしか流通されないで、一番いい所が使いにくく使われにくい、木が出てこない状況になっています。これが智頭の状況でもあり、全国の有名林業地でも同じような状況になっています。ですから、一番いい部分、一生懸命育ててこられた人たちの気持ちに呼応するため、A材対策の必要性が叫ばれていますが、これと言って手立てが今無い実態であります。「木は高い」と言われる方もおられるんですが、その部分もご理解頂いて、「木は高くてもいいもの」という理解で、家に木材を使って頂けたらありがたいなと考えています。

東根: 福壽先生に対して、「故郷岐阜よりも鳥取を永住の地に選んだ智頭の魅力は何ですか」という質問があります。

山本: 別に故郷を捨てたわけではないんですが、私の生まれた所は岐阜県の関ヶ原町今須という地区です。今須林業ということで、択伐林というのは選択的に伐採して収穫するという、持続的な森林経営をしてきた所です。現在、先祖の育ててきた立派な木は沢山あります。ですが高級材は売れないですね。その為に林業を離れる人が増えて、結局は山が荒れつつあると言ってもいいですね。ただし、今須地区のエリアはそれほど広くないんですね、智頭でいうと一つの谷くらいです。関ヶ原と合併したのは私が小学生くらいの時点で、関ヶ原はご存じのように観光、観光、また観光で、古戦場ですから、テレビの時代劇があると、観光客が押すな押すなでやってきます。常に関ヶ原町は観光の事ばかり考えていて、林業は二の次ということですね。智頭町というのは、林業が基幹産業です。一番に林業の話が出てくる所です。ここだったら自分の持っているものをお伝えして意味ある事かな、と思ったんですね。そして、関ヶ原町は捨てたわけではなく、繋がっています。前の町長の材木屋は私の親友ですし、行ったり来たりして向こうの林業にもコミットしていていると思っていますけど、軸足は智頭に置いてやっていくつもりです。岐阜を捨ててはいませんし、日本を見限ってもない。これから、智頭から全体をけん引していかうと考えてますのでご安心ください。

東根: 「植林を進めていく為に何をすれば一番よいのか、意見を聴かせてください」というご質問をいただいています。

尾崎: まず木を使ってもらえることなんですよ。森林資源は循環できるので、木を伐採して使って頂ければ、山は若返って植林が可能になるので、そこかなと思います。木を使ってくださいというお願いなんですけど、最近県の中部や大山周辺で、ナラ枯れ被害がかなり発生しています。今年すごく三朝町や大山の周辺、日野町までナラ枯れ被害があがっています。ナラ枯れは、松くい虫と違いまして、昔から日本にいた、カシノナガキクイムシという虫が入って、その虫の中にいる菌が枯損をさせているんですが、今も木が使われない、特に広葉樹が使われないという状況があって、特にミズナラ・コナラが枯れています。昔は薪や炭焼きの原材料として使われていたんですが、今ほとんど使われません。木が大きくなって高齢木になると、体力がないものですから、虫の被害が顕著に発生してくるという状況です。若い木には入りにくいので、積極的に木を伐って使う事が非常に大切ということになります。質問の回答になってないかもしれませんが

んが、まず植林を進めていく為には、まず木を使う。使えば、山の伐った部分が空く、そこに植林ができる、ということなんです。後はコストの問題で、木材価格がうまく連動すれば、資源・経済の循環として回っていく。そこが一番難しいんですが、植林経費が木材の伐採経費から捻出できないということもあります。ただ、その部分を長期的に考えて木を使って頂くと、高いかもしれないですが、植林、森林の環境保全に繋がるということでございます。

田口: 「鳥取県に植林したいんです、自腹で」と言われたら？

尾崎: まずは、森林組合に相談してください。今、山を手放す方がおられます。市町村に自分の山を持っていたとしても管理ができないので誰か管理をお願いできませんか、と言われる方も少しずつですがあります。そういう所を活用されて、伐採なりして植えることは可能かなと思います。ただ、まだ具体的にシステムとして出来上がっているものではないので。今、山林の売買というのも、森林組合に相談が来ていると思うので、その部分を購入されて……

田口: 私が苗木一本買って植えに行くから植えられますか、という話です。植林費用がないんだったら、自腹で行きますから一本植えますよ、というのは可能なんですか。

尾崎: その環境整備をしないとイケないですね。

田口: 困ってらっしゃるなら植えに行きたいな、と思うくらいですけど。質問された方も、そんな感じかなと思ったんです。違うのかな？

山本: 二つのお話をします。一つは昔、法正林思想というのがありまして、伐採して得た収益は、植栽コスト・保育管理コストとして次の世代に回していく、その余剰が自分の懐に入るという発想だったんです。ですが、植栽してから10年くらいの間ものすごくコストがかかるんですね、下刈りしたりいろんな事をしないとイケない。後は間伐や枝打ちをやって育てていくんですけど。伐採して得られた収益で、全てをまかなう事はできません。どうしたらいいかというと、植えることによって環境改善にものすごく役に立つので、これにこそ税金を投入する。それから後は技術的な問題で、鹿問題ですね。先ほども言いましたように、スギであれ広葉樹であれ、植えるとシカが食います。これをどうやるかというのが、今うちの塾の大きなテーマなんです。これから植える所はどんどん増えていきます。ここにどうやってシカの被害を受けないようにして木を植えるか。コストがかかったら大変ですね。それも含めて研究しなきゃというところです。これは本当に喫緊の課題ですね。

東根: ここで質疑応答に入りたいと思います。フロアの方からご質問がありましたらこの場でお受けしたいと思います。

フロア: 私も実家の山を手入れせずに不在地主になっているんですけど、尾崎局長が木は高いからとずっとおっしゃってますけれど、本当に生産コストから逆算した時に、実際に消費者が買う木が本当に高いのか。それだけ金と労力をかけてやっているんだったら当然の価格なのか。そして日本の戦後の政策で、外材南洋材を、安い木を沢山輸入してきて、国産材が全然使われなくなって価格が下がってきたというのが私の知識としてあるんです。日新なんかもソ連からマツを入れていますけど、ツンドラ地帯を全部伐採して、北朝鮮の協力で行っているんですけど、そこは日が射して

ツンドラが溶けて大きな湖で、人が住んでいる所を侵食しているそうなんです。商社が外材を輸入するのをやめて国産材を使う事を政策として重点を置かないと、と思うんですが、何かいい方策はないでしょうか。

尾崎:現在の木材価格になったのは、外材に関税がほとんどかかってなく外材の価格に引っ張られている、という今のお話の通りです。我々としても、資源として日本のスギやヒノキを活用していくために、コスト低減に取り組んでいます。例えば木材の搬出コスト。これは、5000～6000円/㎡くらいの単価になっています。効率的に木材を搬出しようと、ハード整備、道をつけてフォワーダ等の機械で搬出するという取り組みをやっています。今間伐を中心にやっていて、大体一人当たり約4.6㎡出しており、全国的には4.3～4.4㎡で、鳥取県は全国よりも高いです。あとは製材コストの問題がありまして、外国からなせ多くの材が低コストで入ってくるかというと、機械化をされています。非常にオートメーション化され、大規模で、ほとんど人手が要らない状況、スピードも日本に比べて速いです。材としても向こうのSPF木材とかオーストリアのあたりは、80～100年生の木を伐採していて、間伐もしていますが、皆伐を2ヘクタールを上限にやっています。それもトウヒ等で樹高もかなり高く、径も大きい。一本搬出すると非常に効率がよく、一日あたりの素材生産量が大きいです。日本はまだそこまで大きくなっておりません。山側としては一生懸命木材の搬出費用の低減対策をやっていますが、そろそろ限界に来ているという感があります。今後は、製材業の低コスト化を図っていくことが必要になってくるのではないかと、と思っています。

田口:ローマ法王にお米を送った高野さんですけど、コスモアイル羽咋という宇宙博物館を作るんです、地域振興の為に。どうやって作ったらいいかというのを市として考えた。宇宙博物館だからアポロ11号とかソ連のミューズとか、宇宙に本当に行ったものを展示したいと。絶対に買う事は無理だから、レプリカを作らなければいけない。それにはどれだけお金がかかるか調べたら、ものすごいお金がかかる。実は日本の博物館は非常にレプリカが多いんですって。大体レプリカを置いていて本物は置いていない。ところが彼は、アメリカに行って博物館を見学して歩くんです。すると「レプリカなんて置いたら、それは博物館じゃないわよ。博物館というのは本物を飾るから博物館なのよ。あなたの考えは間違ってる。それは偽博物館でしょ」と言われるんです。高野さんは「そうだな」と。「いろんな行政が博物館を作っているけど、全部レプリカじゃないか」。なんとレプリカを作っている業者は日本に2つしかなかったんです。その2つの業者がいろんな

レプリカをいろんな博物館とか民族資料館に作る。だから全部似通っている。しかもすごく高い。それで彼、NASAに本物を譲ってくれて、ローマ法王の時みたいの手紙を書くんです。NASAは宇宙船を一つ予備を作るんだそうです。予備でずっと置いていても邪魔だし、必要ない。だから1000万で譲ってくれたんだって。それはレプリカを作る何十分の一の金額だったそうです。本物だったら絶対に腐らない。すごい合金でできてから。だから何百年ももつ。「田口さん、この国は常識だと思っている事は常識じゃないよ。だからよく考えなきゃいけない」と高野さんは言いました。行政が言う事や社会的な通念になっている事は、そう思い込まされているだけで、よくよく調べれば抜け道はある。例えばこのホールを鳥取県の木材で作る。それを建築家にきっちり依頼して、コンペティションやってみたら、鳥取の木材で、国産の木材でめっちゃカッコいい世界的なものが作れるんじゃないか。修理コストを考えたらどうなんだ。30年もつものと1000年もつものとどちらを作ったら実際安いのか。そういうことをキッチリと考えてくれる人がいれば、絶対に作れるんですよ。それをやる人が、やっぱりここから生まれてくるんですよ。だから、諦めないでやっぱりやろうよと思うんです。そしていいものを、本物を作ろうよと思うんです。建物は日本の国産材で。それをみんなで目指せばいいと思うんです。

東根:ありがとうございます。議論が白熱したところに恐縮なんですが、実は時間が押してしまったということがあり、ここから司会に戻したいと思います。

司会:森林づくりは暮らしに身近なこと、だからこそこんなに白熱するんじゃないかなと、感じました。お話の輪はこれから広がります。パネリストの皆様は今一度拍手をお送りください。では福壽先生に結びのご挨拶を一言お願いします。

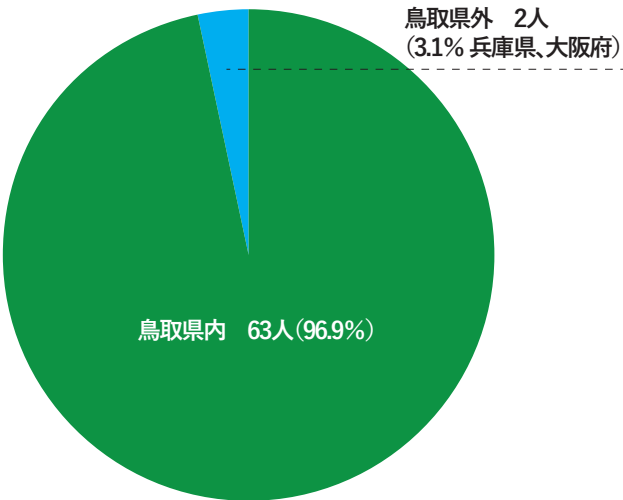
山本:本日は、これだけ沢山の人が私たちのお話を聴いて頂いて、大変感謝を致しますとともに、それぞれの方々がそれぞれの所へお帰り頂いて、ぜひ日本の森林をより活性化させるために、町にしようが山にしようがご活躍を頂ければと思います。日本は森林が67%もあると言いますけれども、本当は一人当たり0.2ヘクタールしかないんです。森林はないんです。この希少な森林をいかに上手に使うか。そうしないと、木材を輸入せざるを得ないんです。それだけ森林は少ないんです。でも、この希少な森林を上手に使って、末永く、ずっと持続して利用していこうと考えています。これからもご協力宜しくお願い致します。ありがとうございました。

司会:ありがとうございました。皆様とはまた、このような夢語りの場でお会いできます事を、楽しみにしております。本日は、ご来場誠にありがとうございました。

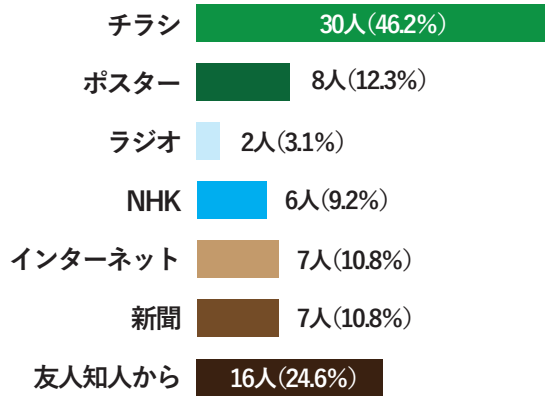


アンケート結果 参加者人数 約150名

1. 今日はどこからお越しになりましたか？



2. どこでお知りになりましたか？



小計(複数回答含む)76人(117%)

*複数の媒体を答えてくださる方が14名あり、
お一人で4つの媒体をあげられる方もありました。

3. ゲストの方々へのメッセージや、フォーラムのご感想をどうぞ。

有益な話をありがとうございました。
パネリストに林業家の人がいればと思
いました。

初めて参加しました。夫が営林署に勤め
ており(退職しましたが)、山の荒廃を嘆
いております。私も国会へ出向き、子供
たちに山の大切さ、自然の仕組みを取り
上げて頂くよう陳情しました。教えるこ
と、知らせることが大切だと思います。

藤本さんが話された子供達への山・森・
木に関する教育や在り様が印象深かつ
たです。田口先生が紹介された、各地の
活動ぶりが刺激になります。

みなさん色々な視点から森林保全につ
いての考えを持っておられて、でも目指す
ところはみんな同じなんだなと思いました。
今日頂いた熱を無駄にしないようつなげ
ていきたいと思ひます。ありがとうございました。
次の機会も楽しみにしています！

多様なパネリストの皆さんの意見・考え
が聞けて有意義でした。加えて、林業を営
みとしている方の意見・考え・現実の声が
聞ければなおよかったと思ひます…。

山本先生のお話はとても分かり易く聞
きました。フォーラムスタッフが若い
方が多くこれからの活動に期待しま
す。ファイト!!

皆様楽しいお話、未来につながるお話
をありがとうございました。木育の話
が興味がありました。

ディスカッション楽しい！興味深い。
森林と人間共存、住みやすい地球！

木の商品のブランディング、売り方etc
皆さんのアイデアを持ったキーマンが隠れて
いると思ひます。間口を広げてそういう人々を
たくさん呼び込んでもらいたいです。

【地域のキーマン】【ホンモノ】【思い込
み】→気になった言葉です。多くの知見
をいただきました。説明がとても聞き
やすかったです(具体的メタファーが
多く)。地域の持つ良さをを知る、発信す
る、健康的な価格、里山:動的安全性、時
間軸、使い続けること、森林環境と人間
の関わり、輪(林)業。

それぞれの分野でお詳しい方とのお話が
交わってとてもよかったです。また会その
ものがかわっておられる方々のあたた
かい気持ちがつたわってくるようでした。

田口ランディさんと山歩きをしたいと
思ひました。各地を廻っておられるの
で広い目線でテーマをとらえられてい
て良かった。

とても前向きなメッセージを最後に発
信されたと感じました。田口さんの表現
力に引き込まれました。

とても真新しい情報がいっぱいでした。
関わってみたいです。

大変良い一日だった。自分の進んできた
道(仕事)が正しかったと思ひた。

新しい知識や森林に対する今までもっ
ていなかった視点を得られて非常に有
意義でした。

来てみて堅いテーマと思ひましたが、
話を聞いているうちに楽しく気持ちが
広がり、自分に何かできることがある
のかもと考えさせられました。

田口ランディさんの快活さに元気をいた
だきました。各地を歩いてその情報を啓
蒙することで「力」となるの如しでしょう。

山登りを始め山の安らぎ、すばらしさを
感じているところです。広葉樹林内の中
での安らぎとても感じます。興味深く拝
聴いたしました。

参加者は若い人が多い。森林林業の将
来が期待できる。

多様な意見を知ることができた。森の更
新の具体的な話を聞きたいと思ひた。

田口さんにまた来鳥して鳥取のキーマ
ンになってほしい。木で家を作るべき
だと思ひた。

4. 未来の森、林業への夢をお聞かせください。

山を守れば人が生きられる。きれいな水に関係する。

みんなが山、田畑を考え続けていくことが一番。

若い世代が森や林業にもっと関心を寄せてくれたらよいです。教育の関わりを考えていかなければなりませんね。

未来へ続く環境づくりへの森と、自然環境(太陽光勢、風力等)のエネルギーの活用による利用等に積極的に協力したい。

自然はつながっていて人は生かされていることを心して森だけではなく山も河も海も大切に守りたい！

まず森林環境を整えて、未来に生きる人たちに豊かな人生を。

若者に身近な存在にしていきたい!!

県民の仕事場、遊びのフィールドとなつて欲しい。

この博物館に古代の丸太船が展示してありました。智頭の杉で丸太船を作ったらどうでしょうか。

日本海、世界の海を美しく。

自立して儲かる林業へ

森には行ってみたいのですが、交通が不便になり行く事が出来ません。休日でもバスが走るといいですね。

大切な森をたくさんの人が大切だと思ってもらえますように。

明るい光の入る森をつくってほしいです。お散歩が気持ちいいので。

この度、鳥取県で林業を職として選び、いろんなご縁があって今日参加させて頂きました。知っていたようで違うこと、理解できていないこと、未知のこと、たくさんあると思います。でも、地球環境を良くしたいという信念だけは忘れずに楽しみながらとりこんでいきたいです。

韓国ではヒノキの活用が盛んで日本のヒノキを山ごと買っていると聞きました。日本でもヒノキの力を生かすべきだと思います。・認知症の予防に役立つ・瞑想室を作ればリラックス、集中、ストレス軽減・学習能力が高まる・良い発想が生まれるなどいろいろ効果あり。

林業でメシが喰えるようになれば、生業となりたてばと思う。

鳥取の良さをアピールできるキーマンが増える。自然と共存していける世の中。

大阪・神戸と云った関西の都会圏がより鳥取の山々に関心をもって貰え、人口が流入する方策がより必要かと思えます。県外の人々に対して魅力ある鳥取の木を紹介するために観光地や鳥取・米子道のIC近隣に建材で建築した「山の駅」を県等公共団体と民間のPFIで運営して山の大切さと豊かさを紹介してもらいたい。

森林をもっとエンタメとして活用し、内外の方々に「来て」楽しんでもらうなどの利用方法はどうか？たとえば東北で糸井重里氏がやっている「100のツリーハウスプロジェクト」みたいな。製品化して、その材として売るだけだと限界があるのでは。

鳥取には木工製品についても独自の意匠が(民藝流)(工業試験場)育ちつつあったのですが、河原のものづくりが地域で復活できないかな？付加価値とブランド化、世界発信を！

「小さい林業で稼ぐ」に尽きるのではないのでしょうか。仙人たれ。必要な時に山に木を伐りに行く、それには仙人の数が必要。

木育を通して子供たちにも豊かな森と心を伝えたい。森に関わる仕事がしたいです。

森、林業に関わることに誰もがプライドを持てるような社会。

1. 広葉樹と針葉樹の原生林の育成を
2. 針葉樹林についてはすみやかな伐採、整備を

ヒトと動物、バランスの取れた共存の場所。当たり前のように森について考える、動くような林業を期待したい。国産木材が再び普及し、日本が間接的な森林破壊国とならないための、更新され続ける森。

生命を育む美しい森を将来にも残していきたいです。新しい美術館に鳥取の木材を使ってほしい。

公園に行くように気軽に安心して入れるみんなで守ってゆくものになればと思います。

一足飛びにはいかないけれど継続するのみ。

たしかに木を沢山使った家に住んでみたい。しかし良い木は高価ですね。難しいですね。

山、森が健やかな状態で次の世代へつなげてゆきますように。自伐型林業がもっとメジャーになってゆけばいいな。

防災に関してやるべきことも次回教えてください。

- ・天然林を末代まで生かす
- ・雑木林を進める

輪業がもう少し活性化し豊かな自然環境と調和した地域になればと思います。

フォーラム参加のものづくりアーティスト・団体

書籍：作家 田口ランディ

木工作品：木地師 藤本かおり

みんなの夢語り(絵)：言葉絵作家 澤田直見・うた・たね

クラリネット演奏：坂本朋子

バルーンアーティスト：花田久美子

木製額：工作社

フラワーアレンジメント：BLOSSOM DECO

智頭杉木の葉ブローチ：企画／智頭の山人塾、制作／えとせとら

映像作品：智頭の山人塾

音響：Sakemoto Sound System

記録写真撮影：水本俊也

記録ビデオ撮影：m&m.co

デザイン：和多瀬彰

協力団体

展示：JST-RISTEX・鳥取大学「生業・生活統合型多世代共創コミュニティモデルの開発」プロジェクト・とっとり花回廊・鳥取県東部農林事務所八頭事務所・鳥取県立智頭農林高等学校・智頭町・智頭町立智頭図書館・智頭町森林セラピー推進協議会・

森のきこりん・空のしたひろば すぎぼっくり・ギャラリーそら・智頭ノ森ノ学ビ舎・鳥取森女

手話通訳：鳥取県西部聴覚障がい者センター

託児：空のしたひろば すぎぼっくり

編集後記

杉塾 塾長 山本福壽

「森林(もり)づくりとものづくりの視点から」と副題をつけた「第2回鳥取の林業夢語り」フォーラムは、昨年にも増して成功裏に終えることができたように思う。

近年、地球環境問題に関心が集まるようになり、炭酸ガスを吸収している木を伐って利用することが、あたかも地球に悪影響を与えてしまうかのように考える人たちがいる。林業は木材を生産する産業であるが、その過程で行う山の手入れは、森林の効率的な成長、つまり炭酸ガス固定の最大化、最適化を促す行為である。手入れが行き届いた若い森林の炭酸ガス吸収能は、老木ばかりの森林や原始の森林の比ではない。林業では成長が衰えた植栽木を収穫し、木製品として社会に提供したのち、再

び炭酸ガス固定の盛んな若木を育てる。まさに輪廻の生業、輪林業である。そして社会が炭酸ガスのかたまりである木製品を長く地上に保持し続けられれば、それだけで炭酸ガスが過剰となった地球環境の改善に貢献できることになる。

フォーラムでは、当初、森林づくりとものづくりの話題がうまくからみ合っていくかどうか心配であった。ところが田口ランディさんの豊かな情報と表現力に参加者全員が魅了され、高揚し、大きな盛り上がりのうちに大団円を迎えることができた。このフォーラムにご参加いただいたすべての方々、そして裏方の仕事や記録にご活躍いただいた多くの方々に、深甚の謝意を表したい。

杉塾「智頭の山人塾」事務局 米井美由紀

みなさまのご来場、ご協力を、本当にありがとうございました。ご回答いただいたアンケートを読ませていただくと、日常の背景が様々な方々がお集まりくださったことを感じました。

今回、森林づくりとものづくりを起点として、視えてきたことはたくさんあります。向かうべきこれからのライフスタイルは？なども。

本書は、パネリストの方々のご意見だけではなく、みなさまからの想いやご意見もできる限り掲載しています。ぜひ、ワークブックとして、今後ご活用いただきたいと思います。

次につながる課題やご提案もたくさんいただきましたので、それぞれのフィールドでひとつでもご友人の方々と話してみてください。きっと、未来の鳥取の森林が明るくなります。

メッセージボード「みんなの夢語り」に、「鳥取の子どもたちの夢が実現すること」と書いてくださった方がありました。共感し、ほんとうに、そう願っています。森林づくりはやはり子どもたちの未来とつながると思っています。主催のわたしたち杉塾では、これからも実践として取り組めることは何かを考え、語り合い続け、ネットワークを広げてゆきます。ご一緒してみませんか？



編集

杉塾「智頭の山人塾」

〒689-1415 鳥取県八頭郡智頭町郷原 238 旧山形小学校

メール：office@yamahito-juku.com

ホームページ：https://yamahito-juku.com/